

〈随筆〉

子育ての「文献」を読む

小川 嗣夫

はじめに

児童憲章によると、児童は人として尊ばれ、心身共に健やかに生まれ、家庭で正しい愛情と知識と技術をもって育てられ、個性と能力に応じて教育され、虐待・酷使・放任その他、不適当な取り扱いからまもられることになっています。児童がそのように育てられなければならないのは、よい国民として人類の平和と文化に貢献するためです。

ところで、わが子の幸せを願わない親はいないと言えば、誰しもその通りだと思うに違いありません。確かに、どの子どもの親も、わが子の幸せを願って懸命に努力しています。しかし、さまざまな事情があって、2008年(平成20年)現在、日本全国の565ヵ所の児童養護施設(保護者のいない児童、虐待されている児童、その他養護を必要とする児童の施設)で生活する18歳以下の子どもたちは約31,600人いるといわれています。そして、児童養護施設への入所理由は、8割以上が虐待だといわれています。2012年度(平成24年度)上半期の児童虐待は、過去(2000年以降)最多で、昨年同期より62%増(248件)だったということです(2012年(平成24年)9月6日 朝日新聞夕刊)。子どもの親は虐待ではなく「しつけ」だったと弁解しますが、加害者の60%が実の両親で、身体的虐待を行ったケースが70%だったということです。虐待を受けた子どもたちは、一見、普通の子どもに見える場合でも心に非常に深い傷を負っていますので適切な対応が不可欠です。もし、これらの子どもたちが、暖かい家庭を知らず、愛される経験をしないまま親になって、わが子を虐待し、養育を放棄するという世代を超えた悪循環が生じる

ことも考えられます。

また、不登校の子どもは、1975年頃から増え始め、2001年には小中学生合わせて138,733人に達しました。現在は、小中学生合わせて122,432人(2009年度(平成21年度)文部科学省調査)です。これらの子どもたちは、各学校が卒業させる努力をした後でも引きこもりを続け、将来は定職にもつかず親のスネをカジって暮らす可能性が高くなります。

児童虐待や不登校は、時代が生み出した社会現象で歴史的文化的産物と言えますが、昔は、子どもをどのような存在と考え、どのように子育てをしたのでしょうか。本稿では、日本の子育ての書の中から現在の子育ての問題を解くヒントが得られないかどうかを探ることを目的としました。

日本では、17世紀の半ば頃から一般向けの子育ての書が現われはじめ、18世紀には多様な子育ての書が著わされました。その主なものは『子育ての書』(山住・中江, 1976)に収められています。子育ての書の内容は、その時代の子育ての実態の記述ではなく、子育てはこうあるべきだという考え方や主張が中心です。しかし、そのような子育ての考え方を理解することによって、時代を超えて変わらぬ子育てのあるべき姿を改めて考えることができると思います。

1. 子育ての意味

子育てとは、親子という運命的(選択不可能)な人間関係(血縁というきわめて特殊な人間関係)の中で、親が子どもを養育・教育することによって、子どもを社会化すること(文化の鑄型にはめ込むこと)ですが、その目的は文化を継承し、社会を創造・発展させるところにあります。しかし、近世では、子育ての意味は、家の存続のためでした。「子を求むるは、継嗣を立てんがためなり。継嗣の受くる所、家と祭祀となり。」(室鳩巢, 『不亡鈔』)しかし、福沢諭吉は、子育ては、家を継がせるためではなく、子どもを一人前の人間とするためであり、教育は父母の役目であると主張しました。近代

ヨーロッパでは、子育ては自分が成長するためであると考えた人たちが多くなりましたが、わが国でも1980年代には(総理府の調査)、子どもを育てることによって自分が成長すると考える親が多くなってきました。

2. 日本の子育て

日本では、昔から子どもを子宝として大切に育ててきました。たとえば、山上憶良の「銀も金も玉も何せむに 勝れる宝 子にしかめやも」や「それ貴さも賤しきも、智あるも愚かなるも、生きとし生けるもの、ひとりとして我が子を愛せざるはあらず。」(作者不詳、『女家訓』)は、そのことをよく示しています。そして、子どもは一人前になるまで成長の節目毎に種々の儀式(たとえば、お食い初め、七五三、元服など)によって、社会的に(周りの人々に)確認されながら育てられてきました。このように日本の子育ては、イソップ物語の狼と狐の話(子どもは、まだ人間にはなっていない)や子どもを籠の中に入れて投げ合って遊んだといわれるヨーロッパ世界とは全く異なっています。大森貝塚の発見者モースは、『日本その日その日』の中で「世界中で日本ほど、子どもが親切に取扱われ、子どものために深い注意が払われる国はない。ニコニコしている所から判断すると、子どもは朝から晩まで幸福であるらしい。」と述べています。

3. 子どもの本性

まず、子どもはどのような本性をもって生まれてくると考えられていたかを見てみましょう。日本の教育学の祖、貝原益軒は次のように述べています。

およそ人となれるものは、皆天地の徳をうけ、心に仁・義・礼・智・信の五性を生まれつきたれば、その性のままにしたがえば、父子・君

臣・夫婦・長幼・朋友の五倫の道行なわる。これ人の万物にすぐれて貴き処なり。ここを以て人は万物の靈と云えるなるべし。靈とは、万物にすぐれて明らかなる智あるを云えり。されども、食に飽き、衣を暖かに着、居りどころをやすくするのみにて、人倫の教えなければ、人の道を知らず、禽獸にちかくして、万物の靈と云えるしるしなし。いにしへの聖人これをうれい、師をたて学び所をたてて、天下の人に、いとけなき時より道を教え給いしかば、人の道たちて禽獸にちかき事をまぬかる。およそ人の小しなるわざも、皆師なく教えなくしては、みずからは為しがたし。いわんや人の大なる道は、いにしへの、さばかり賢き人といえど、学ばずしてみずからは知りがたくて、皆聖人を師として学べり。今の人、いかでか教えなくしてひとり知るべきや。聖人は、人の至り、万世の師なり。されば人は、聖人の教えなくては、人の道を知りがたし。ここを以て、人となる者は必ず聖人の道を学ばずんばあるべからず。その教えは予めするを先とす。予とは、かねてよりという意、小児のいまだ悪にうつらざる先に、かねて早く教ゆるを云う。早く教えずして、悪しき事に染み習いて後は、教えても善にうつらず。いましめても悪をやめがたし。古人は、小児の初めてよく食し、よく言う時より早く教えしとなり。(貝原益軒『和俗童子訓』1710)

このように、子どもは生まれつき五性をもっている。したがって、自然にしておけば人の人たる道が備わってくると考えています。しかし、教育をしなければ、鳥獸と同様になってしまう。まともな人間になるためには、先生について教えを受けなければならない。そして、学び始めるのは、早い方がいいと主張し、次のように述べています。

いとけなき時に教えなく、年長じてにわかになんぞに諫むれども、従わざれば、本性あしく生まれつきたるとのみ思う事、いとおろかに惑いのふ

かき事ならずや。父母やわらかにして子を愛し過ごせば、子怠りて父母を侮り、慎まずして、行儀あしく、気随にして、身の行ない悪しく、道にそむく。父たる者、威ありて恐るべく、行儀ありて手本になるべければ、子たる者、恐れ慎みて、行儀正しく、孝をつとむる故に、父子和睦す。子の賢不肖、多くは父母の仕業なり。父母いるがせにして、子の悪しきをゆるせば、悪を長ぜしめ、不義におちいる。これ子を愛するに非ずして、かえりて子をそこなうなり。子をそだつるに、幼きよりよく教えて戒めても悪しきは、まことに天性の悪しきなり。世人多くは、愛にすぎて驕らしめ悪を戒めざるが故、習いて性となり、ついに不肖の子となる者多し。世に上智と下愚とはまれなり。「上智は教えずしてよし、下愚は教えても改めがたし」（『顔氏家訓』教子）といえども、…世に多きは中人なり。中人の性は、教ゆれば善人となり、教えざれば不善人となる。故に教えなくんばあるべからず。（貝原益軒『和俗童子訓』）

幼いときに教育せず、大きくなってから教育しようとしてもうまくいかない。そういう場合に、その子は生まれつき悪い人間なんだと考えるのは、大きな間違いである。子どもを甘やかし、気ままにしておく、まともな人間には育たない。しかし、幼いときから十分に教育しても悪い子は、それは生まれつき悪い人間だ。しかし、一般的には、非常に優れた子どもも、馬鹿な子どもも少ない。世の中に多いのは中位な子どもである。中位の子どもは、教育を受けると善人になり、そうでなければ善くない人間になるので、教育が不可欠だというわけです。

このように、大多数の子どもは道徳的及び知的側面の能力が中位に生まれついている。もし、まともな育たなかったとすれば、それは、父母がその子の幼い時に良い教育をしなかったからだということです。しかし、子どもの中には育てやすい子どももいれば育てにくい子どももいることも事実です。Thomas et al.(1970)の縦断的研究によると、育てやすい子ども(い

わゆる、親は無くてもスクスク育つ子ども)は40%, じっくり型の子ども(何をさせても時間のかかる子ども)は15%, そして、育てにくい子ども(いつも不機嫌で、たとえば、離乳食のスプーンが近づいてくると払いのけるような子ども)は10%だったということです。

ところで、親が大した養育上の努力もしないのに立派に育つ子どももいれば、逆に、親が粉骨砕身して育てたにもかかわらずロクでなしに育つこともあります。これはどのように考えればいいのでしょうか。それは親子の「相性」(頼藤和寛, 1991)によるのかもしれませんが。つまり、親が悪いのでも子どもが良くないのでもなく、時代と親と子の組み合わせが幸運だったか、不運だったかによるのかもしれないということです。また、親(教育者)は同じように躾ける(教育する)と、同じような効果があるはずだという信念をもっている人が多いかもしれませんが、環境から受ける子どもの感受性には大きな個人差があります。恵まれた環境でグレル子(たとえば、非行少年や家庭内暴力児)もいれば、赤貧にも負けずしっかりした子もいます。躾けをし過ぎて失敗することもあるれば、躾け不足で出来損なうこともあります。ほったらかして育てるのに適した子もいます。要するに、子育てが成功するか失敗に終わるかは、子どもの生来の特質と環境(育てられ方も含めて)との組み合わせの妙なのです(頼藤和寛, 1991)。

日本では、すでに古い時代から、子どもは一人ひとり皆違うことが理解されており、それぞれの子の性(タチ)に合わせて適時に教育すべきであると言われてきました。

貴きも賤しきも、知・愚・賢・不肖のわかち之有り。生まれつきのひとしからぬ事は、なお人の面のごとく、数千百人の多き、それぞれに品ことなりておなじからず。(稲葉迂斎『幼君輔佐の心得』)

すべて幼児の教戒、その節、天の時を考え、その児の質をはかりて、節をたがうべからざるなり。(山鹿素行『山鹿語類』)

子どもは生まれたときから一人ひとり皆違っているということは、親でなくても誰でも知っていました。しかし、行動主義心理学の全盛時代には、この厳粛な事実を無視してきました。Watsonは『*Behaviorism*』（1925）の中で「私に健康でいい体をした12人の赤ん坊と、彼らを育てるために特別な世界を私に与えて下さい。そうすれば、私はでたためにその内の一人を取り、その子を訓練して、私が選んだある専門家…医者、法律家、芸術家、大実業家、そうだ乞食や泥棒にでも、その子の祖先の才能、嗜好、傾向、能力、職業がどうだろうと、きつとして見せよう。」と豪語したのです。そして、このような環境万能論が教育界に蔓延し、知能の大半、運動能力等は、ほとんど教育や環境で決まると考えられ、教育関係者は口を開けば、「どの子どもみんな同じく生まれついている。やればできる。できないのは努力が足りないだけのことだ。みなさんには無限の可能性があります。」と喧伝し、厳然として存在する素質という有限性を無視し、センチメンタルな夢に浮かれてきたのです。今でも、育児書、子育ての書にこの残滓が散見されるのは本当に憂うべきことです。

しかし、子どもがそのような個人差の上に、環境からの影響を受けながら育っていくこともまた確かなことです。子どもは幼いときから、周囲の人をモデルとして自律的に学んでいく。したがって、子どもを育てる者は、子どもの良いモデルにならなければならない。山鹿素行、貝原益軒、福沢諭吉は、それぞれ次のように述べています。

ことに骨肉分身の父なるを以て、子幼稚の間は、己が父を以て天下の大富人・大貴人、才知・徳業父にこゆるものあらざらざると思うがゆえに、視聴言動、各々父を手本といたすものなり。…父母その身を修め慎まずして子の子たらん事を求むるは、甚だあやまれりと謂う可きなり。これ平生の身をつつしむべきゆえなり。（山鹿素行『山鹿語類』）

およそ人はよき事も悪しき事もいざ知らざる幼き時より習い馴れぬれば、まず入りし事、内に主として、すでにその性となりては、後に

又よき事・悪しき事を見ききしても、移りかたければ、いとけなき時より、早くよき人にちかづけ、よき道を教ゆべき事にこそあれ。

小児をそだつるには、…乳母・かしずき従う者をえらぶべし。心おだやかに、邪なく、慎みて言葉すくなきをよしとす。わろがしこく口利き、いつわりを云い、言おおく、心邪にしてひがみ、気猛くほしいままにふるまい、醜醜をこのむを悪しとす。およそ小児は智なし。心もことばも、万のふるまいも、皆そのかしづき従う者を見習い、聞き習いて、かれに似するものなり。

乳母を求むるに、必ず温和にして慎み、まめやかに言葉すくなき者をえらぶべし。乳母の外つきしたがう者をえらぶも、おおようかくの如くなるべし。

およそ小児は、早く教ゆると、左右の人をえらぶと、これ古人の子をそだつる良法なり。必ずこれを法とすべし。(貝原益軒『和俗童子訓』)

さてまた子を教えるの道は、学問手習いは勿論なれども、慣るるの教え、大なるものなれば、父母の行状正しからざるべからず。口に正理を唱うるも、身の行い鄙劣なれば、その子は父母の言語を教えとせずして、その行状を見慣うものなり。(福沢諭吉『中津留別書』1870)

幼い子どもは、この世の中でお父さんが一番偉いと思っているので、お父さんを手本とするものだ。また、一般的に、子どもはそばにいる人のまねをするので、子育てをする人は心が穏やかで、口数の少ない人の方がいい、ということです。そして、福沢諭吉は、父母の行いが正しくなければ、子どもは幾ら口で言っても言うことを聞かない。子どもは親の言うことよりも、行うことを真似るものであることを指摘しています。Bandura (1977)はモデリング説の中で、子どもというものは、親たちがこうしなさい、ということをしなさいものだ。むしろ、親たちがやっていることをするものだ、ということを指摘していますが、そのことは、日本では古くから

知られていたことです。正に、「叱られた通りに母は叱るなり(柳多留)」であります。

ところで、子どもが悪くなる理由を子育ての文献ではどのように説明しているのでしょうか。それは、教え方が分からず悪事を許したり、嘘を教えたり、怖がらせたりするからです。貝原益軒と大原幽学は次のように述べています。

およそ小児の悪しくなりぬるは、父母・乳母、かしずき馴る人の教えの道しらずして、その悪しき事をゆるし、したがい褒めて、その子の本性をそこなう故なり。あるいは、しばらく泣く声をやめんとて、欺きすかして、姑息の愛をなす。その事まことならざれば、すなわちこれ、偽りを教ゆるなり。又、戯れにおそろしき事どもを云いきかせ、よりより威しいるれば、後に臆病の癖となる。…ゆうれい・ばけもの・あやしく真なき物がたり、必ず戒めて聞かしむべからず。(貝原益軒『和俗童子訓』)

子を添乳して寝さしむるに、「早く寝よ。泣くと化け物が出る」などというて小児に畏怖心を生ぜしめ寝に付かしむるは、往々ありがちなことなりと雖も、かくの如きことは大いに悪し。

子孫に馬鹿者の出来るは、親の意思によるなり。親が気儘なるときは、その子は馬鹿者か又は悪人になるものなり。(大原幽学『道德百話』)

では、親はどうすべきなのでしょう。それは、幼い時に子どもの得手とするものを見つけて、早く伸ばしてやることです。しかし、子どもの好き放題にさせるということではありません。

幼き時より、必ずまずその好むわざをえらぶべし。好む所尤大事なり。…幼きより好めば、その心癖になり、一生その好みやまざるもの

なり。…小児の時より、年長ずるにいたるまで、父となり、かしずきとなる者、子のすき好む事ごとに心をつけて選びて、好みにまかすべからず。好む所に打ちまかせて、善し、悪しを選ばざれば、多くは悪しきすじに入りて、後は癖となる。一たび悪しき方にうつりては、とりかえて善き方にうつらず、戒めても改まらず、一生の間やみがたし。…故に子をそだつるには、ゆだんしてその好みにまかすべからず。早く戒むべし。おろそかにすべからず。(貝原益軒『和俗童子訓』)

幼い時にその子が好むものを選んでやればよい。その幼い時に非常に好きなことは、その子に才能があり、一生続くものだからというわけです。しかし、子どもの好き勝手にさせると、子どもは得てして悪いことを選んだりするものです。悪いことを後で改めようとしても、なかなか難しいので、早く直すことが大切です。さすがに、貝原益軒の観察は鋭いと感心させられます。かつて早期教育論者の後ろ盾になってきた「三つ子の魂百まで」という諺は、乳幼児期にできるだけ早く教育しておかなければ、後からでは取り返しがつかないという意味に解釈されてきました。しかし、この諺は、幼い時に好みという形で、その子に明確に現われた、際だった特質は一生続くものだという意味に解釈すべきでしょう。

4. 子育ての目標

小嶋(1989)によると、近世の日本の子育て論にみられる目標は、自分に割り当てられた身分や役割を受け入れ、それに応じた課題を忠実に遂行できる人間になること、あるいは、調和的な対人関係をもてるような人間に育てることにあったということです。脇坂義堂は、それぞれの人が目標に沿った人間になれるように家業家職大明神のようなものを設定し、信仰のアナロジーを用いて誰にでも分かるように説いています。

人の世を渡るは、皆全く名々の家業家職大明神の御めぐみなれば、有難く脇目なく大切に信心すべき事なり。そもそも人の家職というは、主人たる者は家来を善に教え導き愛しあわれむが、家業なり。親は子に慈愛あつく、よく教えそだつるが家職なり。兄は弟を愛し恵むが家業なり。夫は行儀正しくて妻をよく教ゆるが家職なり。家来は主人を大切にし、忠をつくすが家業なり。子は身を捨てて親を敬い安心させるが家職なり。妻、夫に順いおとなしく、少しも恠気・偏頗の心なく、貞を守るが家業なり。弟は「兄は親なり」真実に敬いて、よく順うが家職なり。朋友は互いに信を以て交わりあしき方へ心をよせず、むつまじくたすけあうのが家業なり。士は士たるの道をはげみ、百姓は百姓たるの農耕するが家職なり。職人はその職分に出精し、商人はその商いに油断なくせいをだすが家業なり。…この御神を祭り奉るには、儉約質素の御造酒をささげ、正直の御燈明をかかげ奉り、堪忍辛抱の御鏡をそなえ、家内和合の御神樂をあげ、わが心を清浄にして、日夜怠らず信心堅固につとむる時は、一代貧窮困窮の大難をまぬかれ、運をひらき富貴にいたる事速やかなれば、幼稚の時よりこの家職大明神を信心して、靈驗あらたかなる事をよく知りて、神の御恩を有難く思うべし。(脇坂義堂『撫育草』1803)

家父長制の時代は、家庭では主人が一番偉い人で、妻や家来を教え導く立場でした。1950年代の初め頃までは、家庭ではお父さんが一番偉い人でした。ほんの60年ほど前のことです。お父さんの決めたことに誰も反対はできませんでした。子どもが口応えなどできなかった時代です。「サザエさん」の連載当初、玄関で三つ指をつけて夫波平さんを送り迎えしていた妻フネさんが発言力を増し、波平さんは局長から「降格」を繰り返して「ヒラ社員」になってしまいました。これは、戦後の夫の地位低下という時代の流れを反映した結果でした。男は外で猛烈に働かされ、妻が教育、家計と家の実権を握り発言力を強めた時代のことです。お父さんは家庭で

一番いい場所を子どもや奥さんに譲り、右顧左眄(うこさべん)しながら「ダメおやじ」と詰(なじ)られないように気を遣って暮らすことになりました。お母さんは男の子と連合軍を作り(いわゆるリズの歪んだ家族)、お父さんのようなダメな男にはなるなど暗黙裡に説諭した時代が生まれました。誠に、「父たることを 明日より辞めむ 春の霜はじく 雉子(きぎす)の尾羽根群青」(塚本邦雄)であります。しかし、父なんて存在は誰も認めてはいない、自分だけが父だと思っている自己満足の幻想に過ぎないのでしょうか。山田(1983)によると、母-子の癒着が強く、父を憎む気持ちが強い場合には、エディップス・コンプレックスを超えられず、自己中心的では社会で生きていけないことを悟れない人間になり、甘えが強く自己中心的で、モラルやルールを無視して好き嫌いの行動原則で行動する人間になりやすいということです。そして、自分に自信が持てなくなると、物事に極端にこだわるといった強迫症状や、誰かが自分を困らせようとして〇〇しているといった敏感症状が出ようになると指摘しています。そのようなものの考え方の背景には、自分が〇〇になったのは(なれないのは)、××が悪かった(悪い)からだといった、さまざまな困難を人の所為にする、外罰的な原因帰属で判断する時代精神があるからではないかと思われます。しかし、大人になれない青年たちも親への依存から離れて孤立するのではなく、少しずつ経験を積んで自信をつけ、親以外の人との相互信頼関係を築いて、できるだけ早く、世間という「大海原」へ漕ぎ出してもらいたいものです。

ところで、教育基本法は1947年(昭和22年)に制定されましたが、国民一人ひとりが豊かな人生を実現し、わが国が一層の発展を遂げ、国際社会の平和と発展に貢献できるようにするために2006年(平成18年)に全部を改正して制定されました。教育基本法第1条には、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」と謳われています。

教育は国家百年の計、国を發展させるためにも、学校だけではなく家庭においても子どもの人格の完成を目指して行なわれなければならないものです。子どもたち一人ひとりが、自分は社会に役立っている、人のためになっているという実感を持って生きていけるように育てなければならないということです。そして、青年期になれば、自分は何のために生きているのかを改めて悟らなければならないでしょう。そうでなければ、一寸した困難にぶつかったただけでもへこたれてしまいます。人生は失敗の連続です。こんなはずではなかった。あの時ああしておけばよかった、こうしておくべきだったなど、後悔の連続です。しかし、済んでしまったことをクヨクヨよせず、石橋を叩いて座り込まず、今ここを「生きるべき何故」を問い直してもらいたいと思います。家庭は、夫婦がお互いに尊重しながら力を合わせて、未来に向かって進もうとする青年たちの背中を押す「場」なのですから。

5. 子育ての方法

近世の日本の子育ての方法は、言葉による温和な方法でした。たとえば、子どもが泣いても脅したりせず、慰める方法でした。フロイス(1565)は、「(日本人は)子を育てるに当たって決して懲罰を加えず、言葉を以て戒め、六、七歳の小児に対しても七十歳の人に対するように、真面目に話して譴責する。」と、述べています。日本の子育ては、西欧の子育ての基本的考え方である「鞭と戒めとは知恵を与える。わがままにさせた子はその母に恥をもたらず。」(旧約聖書)というのとは対照的です。

たとえば、福沢諭吉の教育方法も「先ず獸身を成して後に人心を養う」であり、衣食に気をつけたり、鄙劣な事や賤しい言葉などを咎める以外は、自由自在にしておく方法でした。そして、しつけ方は、「温和と活発を旨として、大抵の処までは子どもの自由に任せる」というものでした。しかし、子どもにも分相応の役割を分担させ、人間としての徳を身につけさせ

る必要があるとして、決まり(注)を提示しました。

中江藤樹の子育ての書では、下記のように、幼い子のすることは子どもに任せておけばよい。もし、大人から見て多少気になる振る舞いがあっても、自然と直るものである、と非常に楽観的に述べられています。

童部わざ、戯れごとなどをば、その子の心にまかせて、強ちに戒め制すべからず。いかんとならば、これらのわざは、年たけぬれば、おのずからなおるものなり。子に教ゆるということをあさく心得たる人は、心の教えある事をわきまえずして、幼少の時より成人のものゝの振舞いをさせんと戒めぬるによって、その心すくみ気屈して、異なるものになるものなり。(中江藤樹『鏡草』)

また、脇坂義堂も、次のように子育ては温和な方がよいと主張しています。

「幼稚の者を養育するは、威厳しくするがよろしき」と申す人の候。これも一理ある尤もの事に候えども、やはり温和にそだつ方に及くはなしと存じ候。その故は、童は知にくらきものに候えば、親たる人あまり厳しければ、恐れ親しますずして、良し悪しともに隠し包みて、ただ恐がるのみにて心服をせぬものに候えば、なに事も兎角やわからかに申し聞かせ、よく呑み込み心服いたし候様に、随分温和にそだて上げ申し候がよろしきと存じ候。たとえば、悪しき事ある節に強く節檻を用ゆる方よりは、よき事ある節に随分ほめてつかわし候わば、幼稚心によるこびて、またこの後もほめられん事をねがいておのずからよき事をはげみ、よき事をせんとする心から自然とよきこと好きになり、終には善に至る物なり。また悪しき事ある時にのみ折檻を強く用ゆれば、幼稚心に心服はせず、ただ折檻のみを恐れて、また悪しき事ある節はその悪しきを深く隠して知らさぬようになり行く物なり。悪しき

を隠し包み習うは、これ大悪に至るの基にて、終に偽り者・悪人とも成るものなれば、とかく真実心より合点させずして恐れこわがらすのみにてはよからぬ事と存じ候。随分温和に申し聞かせ教えそだつがよろしきかと存じ候。(脇坂義堂『撫育草』)

脇坂義堂が、優しく育てた方が良いと主張している理由は、子どもは知識が少ないので、親が厳しすぎると、ただ恐れて何でも隠すようになるだけだ。良いことをしたときに十分ほめてやれば、またほめられたいと思って良いことをするようになる。ところが、悪いことをしたときだけ強く叱ると、叱られることを恐れるようになって、悪いことを隠す習慣が付き、そのうちにもっと悪いことをする人間になる。とにかく、子どもに納得させるように優しく言い聞かせればよろしいというわけです。脇坂義堂の子育て論は、口を開けば叱ることの多い日本の母親にとって傾聴に値するものであると言えるでしょう。

ところで、現在の子育ての書は、ほとんど褒めて育てる式の教育方法です。その方が子どもの自尊心を高め、失敗しないからでしょう。しかし、貝原益軒と大原幽学は、子どもをほめて育てるのは良くないと主張しています。

およそ小児の善行あると、才能あるを褒むべからず。褒むれば高慢になりて心術をそこない、わが愚かなるも不徳なるをも知らず、われに知ありと思ひ、わが才智にて事たりぬと思ひ、学問を好まず、人の教えをもとめず。もし父として愛におぼれて、子のあしきを知らず、性行よからざれども君子のごとく褒め、才芸つたなければもすぐれたりと褒むるは、愚かにまよえるなり。その善を褒むればその善をうしない、その芸を褒むればその芸をうしなう。必ずその子を褒むる事なかれ。…「人に三愚あり。我をほめ、子をほめ、妻をほむる。皆これ愛におぼるるなり。」(貝原益軒『和俗童子訓』)

必ず必ず、口にてほむ可からず。兎角子供の心の先をおらぬようにす可し。唯志をたつぷりと育つるがよし。(大原幽学『心得草』)

貝原益軒と大原幽学は、子どもをほめると、子どもは自分は偉いと思つて、高慢になり、人に教えを請うたり、勉強しようという志を失うと主張しています。この主張を、ほめて育てるのは良くないという説だと表面的な解釈をすれば、ほめるという社会的強化の効果を見逃しており、脇坂義堂の主張にも反するように思われます。脇坂義堂が述べているように、子どもは、ほめられるとますますほめてもらおうとして良いことをするようになります。それは、ほめられることによって、自分が本当に良いことをしたのだということを確認できます。その結果、自尊心も高まります。

したがって、貝原益軒と大原幽学の主張は、子どもを高邁にさせるほどほめてはいけないという点を強調していると考えられます。貝原益軒は、さらに親と子の心構えについて次のように述べています。

子弟を教ゆるに、いかに愚不肖にして、若く賤しきとも、甚だしく忿り罵りて、顔色と言葉をあららかにし、悪口して辱しむべからず。かくの如くすれば、子弟わが非分なる事を忘れて、父兄の戒めを怒り、恨みそむきて従わず、かえって父子兄弟の間も不和になり、相やぶれて恩を損なうにいたる。ただ従容として厳正に教え、いく度もくり返し、ようやくようやく告げ戒むべし。これ子弟を教え、人材を養い来す法なり。父兄となれる人は、この心得あるべし。子弟となる者は、父兄の怒り甚だしく、悪口して責め辱しめらるるとも、いよいよおそれ慎みて、つゆばかりも怒り恨むべからず。…怒りをおさえて忍ぶべし。忍とは、こらゆるなり。ことに、父母・兄長に対し、少しも心に怒り恨むべからず。いわんや、顔色と眼目にあらわすべけんや。父兄に対して怒るは、これ大いなる無礼なり。戒むべし。(貝原益軒『和俗童子訓』)

これは、香月牛山が『小児必用養育草』で述べた、過保護であることを避け、子どもを徐々に鍛えていくことが大切であるという主張と共通するものであり、貝原益軒の『和俗童子訓』に通じるものです。

富貴の家、その児を愛し過ごし、純帳・緬帳のうちに衣服を厚く重ねて、風の気・日の目にもあわせぬように育てたる児は、その色も黄ばみしらせ、皮膚もうすくして風をひきやすし。(香月牛山『小児必用養育草』)

衣服・飲食・着物・居処・僕従にいたるまで、その家の位より貧しく、乏足にして、もてなしうすく、心ままならざるがよし。いとけなき時艱難にならえば、年たけて難苦に堪えやすく、忠孝のつとめを苦しまず、病すくなく、驕りなくして放逸ならず、よく家を保ちて一生の間の幸いとなり、後の楽しみ多し。もしくは不意の変にあい、貧窮にいたり、或は戦場に出ても身の苦しみなし。かくの如く子をそだつるは、誠によく子を愛するなり。(貝原益軒『和俗童子訓』)

6. 青年期の子育ての難しさ

欧米の著名な教育学者や発達心理学者の子育て論は、幼少期の子育てが中心で、青年期の子育てのことはほとんど何も述べられていません。しかし、子育てが最も難しいのは青年期です。叱れば啼き、叩かれたら逃げるような小さな子どもなら子育てにそれほど大きな問題は起こらないでしょう。しかし、叱られたら怨み、叩かれたら怒って親子に確執が生じるような青年期になれば、暴れ荒れてどうすることも出来なくなります。林子平は次のように述べています。

一つは、その子の善悪邪正に少しも心を懸けず、ただ愛しに愛する

のみにて、十九、二十歳に至るまでも…我儘いっぱい育てる故、その子、道知らずにそだつ内に、悪に染まり易くして、終に無頼人と成りて、その子を捨てるなり。また一つは、折檻して叱り敲く事のみ、子を育てる道と心得て、事ごとに叱り、事ごとにののしり、打ち敲くなり。叱られて啼き、打たれて逃げる間は、まだ無事なり。その子十歳以上、人意地附くに随いて、叱られるれば怨み、打たれるれば怒りて、父子確執を生じ、その終わり不孝の所業と云うにおちて、その子を捨てるなり。二つともに、父たる人の、子を育てる道を知らざる故なり。…ひた叱りに叱る父の子は、叱りに馴れてその叱りに迷惑せず却ってふて心生じ、親に当り心にて態と不作法の事を致し、家内にてあばれ荒れるなり。そのあばれ荒れるる事、仕癖に成りて、終に子に横行せられ、父も兄も手を出す事も仕難き様に成りて、…身を損じ、家を滅ぼすなり。(林子平『父兄訓』)

乳幼児期に大事に大事に、わがままいっぱい育てて、青年期になって、親に当たり、家の中で暴れるようになると父も兄も手出しができなくなり、勘当するとなれば、正に「玉と育てて後に勘当」ということになります。橘守部は、親の一方的な教えや戒めを押しつけるのではなく、子どもにも考えさせ、納得させて受け入れさせるようにするという方法を提案しています。

物の智りを発生には、時々難きふしをとり出でて「今しかじかして、かかる事あらんには、吾子はいかがする」「汝はいかにおもえる」など、問いをかけて、おのおの志をきくべきなり。これすなわち、事とある時の的ともなり、又、その人をする方便なり。(橘守部『待問雜記』)

このように、橘守部は子どもにも事情を話し、おまえはどうする、どう

思うと聞いて、子どもの意向を尊重すべきであると説いています。これは、子どもの人格を十分に尊重しようとする、すばらしい考え方です。今日の子育てもこの考え方に沿って行くべきでしょう。

一方、上記のように、貝原益軒は、子どもは親に叱られても親を憎んだり恨んだりせず、怒りを抑えて耐えることを学ぶ必要があると主張しています。忍とはこらえることです。子どものためにフラストレーション耐性を鍛えさせることです。生きていくということは、耐えがたいこと、忘れがたいことを積み重ねることであります。しかし、耐えがたい経験や、忘れがたいことは、それはそれとして、生きていかなければならないこともたくさんあります。

山田(1983)は、大人になれない青年たちのために、子ども時代に個人強化のためにしつけられた行動原則を再構築しなければならないと指摘し、三つ行動原則を上げています。一つは、脱中心化－自己中心から他者中心の考え方へ、二つ目は、善悪やプライドでの行動レベル、三つ目は、中間状況的人間関係のマスターです。

脱中心化－自己中心から他者中心の考え方へは、相手があるときには他者の存在を意識して考え方を柔軟にするのが大人の思考様式だということです。たとえば、「嘘をつくな」は基本的には正しいのですが、相手の心を傷つけないために、相手の気持ちを慮って嘘をつく必要がある場合もあるということです。大人になるための第1条件は、子ども時代の自己中心的思考から他人中心思考(メルロ・ポンティの脱中心化)で考えることができるようにならなければならないのです。

次に、行動レベルの一番未熟な人は、その人の好き嫌いという最も自己中心的なレベルで行動します。その次は、自分の損得で行動するレベルです。しかし、成熟した大人は、それが善いことか悪いことかを基準に行動できます。

三つ目の中間状況的人間関係(メルロ・ポンティの言葉)のマスターですが、家族や親友と自分(我－なんじ)の人間関係と見知らぬ他者と自分(我－それ)

の人間関係の中間にあって、緊張したり不安になりやすい状況の人間関係を深めていけなければならなりません。中間状況の人間関係では、まず、挨拶しあう関係を築くことから始めなければなりません。たった一言挨拶できれば、人中で最低限の心の安定を保つことができるのです。挨拶ができるようになれば、次は、暑いですねとか、寒いですねといった、語り合う関係になることが必要です。二言目がかけられれば、しばらくの間、疎外感を持たずに集団内で心安らかにいられます。三つ目は、何らかの行動を共にすることで人間関係が深まっていきます。このような人間関係は、普通の大人の中で子どもが自然に身につけていくものです。しかし、そうでなければ、自分で人間関係形成の努力しなければ未熟なままに留まり、歪んだり、孤立した人間になってしまいます。

おわりに

子育ては本当に苦労が多いものです。並大抵ではありません。子どもがめんこいのは乳幼児期だけで、後は、親の心配の種です。だから、昔から子どもはない方が良いと考えた人がたくさんいたようです。たとえば、吉田兼好は「子といふものなくてありなん。前中書王 九条太政大臣 花園左大臣 みな 族(ぞう)絶えん事を願ひ給えり」と『徒然草』に書き残しており、聖徳太子も、生前に自分の墓を建てるに当たり「ここを切れ かしこを断て 子孫あらせじと思ふなり」と言われたと伝えられています。歴史上、格別に恵まれていたと思われる大人物でさえ、子どもはない方が良い、自分は子孫を残すつもりはない、血族が絶えることを願っていたといわれています。

しかし、この地球上の動物も植物も虫も、生きとし生けるものの親は、皆、体を張って命がけ(たとえば、焼け野の雉子)で子育てをし、「いのち」を子孫に繋いできました。現在、わが国は少子化時代(世界保健機構による2012年の日本の合計特殊出生率は1.4)を迎えています。今生きている人た

ちが、子どもを産み・育てるのを「辞めた」ということになれば、いずれ高齢者が亡くなり、人口が急減し、国は衰えて行くでしょう。子育てがどんなに苦労の多い仕事でも、「いのち」を子々孫々に繋いで行くことが、今を生きている私たちの責務です。生きものが、皆んなやっている努力をできないなどというのは本当に情けないことです。多くの若い人たちが、子育ては楽しい、子育てをしたいと思える時代が早く来ることを願わずにはられません。

第二次世界大戦後、住む家がなく、人の屋根裏を借りて暮らしていた親子(屋根裏三ちゃんと呼ばれました)がいました。また、人の家に間借りをして暮らしていた親子がいました。この親子は、たとえ六畳一間の部屋でいい、親子水入らずで暮らしたいと思ったに違いありません。ところが、1970年代に経済的に豊かになり、持家が増加した時代に子ども部屋が作られるようになり、親子が居間から切り離され、『家庭のない家族の時代』(小此木啓吾, 1983)が始まりました。子どもは自分の部屋でテレビを見たりゲームをしたりして自分勝手に過ごし、夜、屋根伝いに自分の部屋に出入りし、家族がいつ出かけ、何時に帰ってくるかを誰も知らず、皆バラバラに食事をする「ホテル家族」が多くなりました。この頃から、子どもは大人のしていることを見て学ぶ(社会的学習)という側面が欠落するようになりました。社会的行動は、教わって学ぶよりも大人の行動を見て(モデルとして)学ぶことの方が多くのように思います。したがって、家庭で親がわざわざ子どもに教えなくても、子どもが親をモデルとして自然に学んでいけるような家庭の暮らし方に再構築する必要があるように思われます。そして、幕末の福井の歌人、橘曙覧(たちばなの・あけみ)の「たのしみは 妻子(めこ)むつまじく うちつどい 頭ならべて 物をくふ時」のように、たとえ貧しくても、何がなくても、家族が顔を揃えて「いただきます」と言ってお食事をしながら、打ち解け話ができる楽しい家庭が「普通」の時代になってもらいたいと心から願っています。

注

定

- 一、子供は活潑にして身体を大丈夫に致す可し。
- 一、暇あるときは必ず家の外に出て運動遊戯し、風雨寒暑も非常の外は一切これを憚りて退縮すること勿るべし。
- 一、人の家に居れば、年齢に相応してその家事の一部分を引き受け、一身の職分を尽くす可し。
- 一、故に身体の健康大切なりとは申しながら、唯、日に遊び戯るるのみにては十分に非ず。遊戯の傍らに朝夕家事を勤めて活動を致し、次第に有用の仕事に慣るること緊要なり。
- 一、今一太郎と捨次郎との年齢は既に家事の一部分を引き受くべきものに達せり。故にその事に当たる可きは自然の順序なり、決して父母の作意に非ず。ここにその仕事を示すこと左の如し。

第一類

- 一、表の庭の内外を毎日掃除、草あれば草を採り、瓦石あれば瓦石を片付ける等、都てその場所の不始末を引き受ける事。
- 一、内の土間煉化石の処一面掃除、但し草履下駄の類を片付け、その外、都て諸品の順序を乱さずして始末する事。

第二類

- 一、南北の縁側、内土間の縁側、新座鋪の縁側、一切雑巾にて拭い、新座鋪の下の間の掃除、柱並びに板鋪、階段、同雪隠の掃除雑巾掛け。
- 一、右第一類、第二類を両様の仕事と為し、兩人隔日に取り替え、毎日これを勤む可し。
- 一、廷等の掃除する者は箒・塵とりをも自分にて始末し、塵芥・瓦・石等は必ず塵とりに取りて塵溜に棄つべし。
- 一、雑巾も雑巾桶も自分にて始末し、何等の事故あるも他人の助けを借る可からず。雑巾掛けの水も自分にて汲む可し。湯も自分にて取る可し。

右の外、運動の為、米も搗く可し、細工道具の取り扱いも試む可し。これらは自分にも面白い事なれば課業の条目に掲げず。尚年齢の長ずるに従いて課業の趣も次第に變ず可もの也。

明治九年四月三日

福 沢 諭 吉(福沢諭吉子女の伝)

引用文献

- 林 子平 父兄訓 1786
香月 牛山 小児必要養育草 1703
貝原 益軒 和俗童子訓 1710
小嶋 秀夫 子育ての伝統を訪ねて 新曜社 1989
中江 藤樹 鏡草 1647
小此木 啓吾 家庭のない家族の時代 ABC 出版 1983
大原 幽学 心得草 1846
総理府広報室 家族・家庭に関する世論調査 1986
橘 守部 待問雑記 1828
武田 鏡村 楽しみは日常の中にあり—『独楽吟』に学ぶ心の技法 2001
Thomas, A., Chess, C., and Birch, H. G. 1970 The origin of personality. *Scientific American*, **223**, 106-107.
脇坂 義堂 撫育草 1803
山田 和夫 成熟拒否 おとなになれない青年たち 新曜社 1983
山鹿 素行 山鹿語類 1663~1665
山名 文成 農家訓 1783
山住 正己・中江 和恵 子育ての書 全3巻 1976
頼藤 和寛 相性 二者関係の性格学 創元社 1991